

「こころを一つにして」

2022年10月9日

コリントの信徒への手紙一 1：10～17

佐々木 佐余子

今朝から「コリントの信徒への手紙」を学びたいと思います。どうしてかという、執筆された年代順になっているからです。この手紙はパウロの第3回目の伝道旅行中に執筆されました。コリント書の挨拶文を読むとコリントにある神の教会へと書かれています。でも他の手紙を読むと、例えば「ローマの信徒への手紙」は神の教会とは書かれていないのです。「ガラテヤの信徒への手紙」にもありません。「エフェソの信徒への手紙」にもないのです。フィリピもありません。コロサイ書、テサロニケ書も同様テモテへの手紙、とテトスへの手紙も同じ、フィレモンへの手紙も然り、ヘブライ人への手紙もそうです。どうしてコリントの手紙だけ神の教会とあるのでしょうか。不思議ですね。神の教会と言うと、何かいかにも立派な信徒さんたちが集まっているようにも感じますが、実際はそのようなイメージとはほど遠い群れでした。コリントはどこにあるかという、今で言うところのギリシャ共和国にあり、地図を見るとコリンソスとありました。周囲が海ですから港町で様々な国の人が行き来し、にぎやかな街だったのです。そして、近くに大都市アテネがあり神々を敬う大神殿が建てられていました。日本で考えたら、この間話した伊勢神宮の前で伝道しているようなものです。そこで思い出すのですけれども、昔、お正月に代々木の明治神宮に何となく足が向いたのです。正月は暇で何もすることがないからちょっと行って見たのです。玉砂利を踏んでざくざくと人々が多く歩いていました。これから祈願しに行くのでしょうか。そしたらマイクを持った若い牧師さんだと思うのですが説教してましたよ。よく神社側で注意しなかったと思います。寛容なんですね。もっとも明治神宮から見たら何のこともないのかと思います。気にするようなことではなかったのでしょうか。もう忙しくて目が回らなかったと思います。そういう牧師さんもおられるのだと思いました。

パウロは第3回目の伝道旅行でエフェソに行った時、この手紙を書いたのです。パウロはアテネを去ってコリントに行った際、そこで、アキラというユダヤ人とその奥さんのプリスキラと出会いました。天幕作りという同じ職業だったので、彼らの家に住み込んで一緒に仕事をしました。この天幕は何に使われるのかという、ローマ軍がギリシャに駐屯する時に使用するのです。簡単に折りたたんで持ち運び出来ます。パウロはローマの市民権を持っていたので雇用されたのではないのでしょうか。パウロは安息日ごとにユダヤ教の会堂で説教し、来ているユダヤ人やギリシャ人に伝道したのです。このコリントの集会はどのくらいの人たちがいたのか、はわからないのですが、一か所だけではなくいくつかの集会があったのではないのでしょうか。10節の見出しに、「一致の勧め」とあります。ここを読むと分派争いをしている様子がわかります。「さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい」と教えます。コリントの教会は分派争いをし

てることがうかがわれます。パウロは対岸のエフェソにいて風の便りにコリントの群れの動向を聞き、心を痛めていたのです。パウロはこのことを 11 節「クロエの家の人たちから知らされました」とあります。「わたしはアポロに」「私はケファに」「わたしはキリストに」と言い争っているのです。結局洗礼を誰から受けたかによって分派が生じるのです。そういうこともあり得るかもしれません。パウロから受けたらパウロ派、アポロから受けたらアポロ派、ペトロから受けたらペトロ派、キリストから受けたらキリスト派です。面白いですね。そういう考えって。人気投票のようになっている。13 節「キリストは幾つにも分けられてしまったのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によって洗礼（バプテスマ）を受けたのですか」と聞いています。前このような信徒さんがおられました。「わたしは自分の名によって祈っていた」つまり主イエスキリストのお名前によってお祈りします。というところを自分の名によってお祈りします、と祈っていたというのです。恐ろしいことです。でもそれに気が付いて改めてくれたらよかったのにと悔やまれます。人にサタンが入ると気が付かないで、あるいは気が付いても修正できなくなってしまうのです。ここが怖いところです。その方は一見大変信仰深い方でした。ですから私たちは常に祈っていなければならないのです。キリスト派とありましたが、キリスト派とはどのような派でしょうか。このキリスト派は直接主イエス・キリストの教えを受けた人たちか、あるいはキリストから直接啓示を受けたと自称する人たちではないかと言われていています。彼らはパウロやペトロを疎んじて誇っていたのかもしれませんが。恐ろしいことです。主イエス・キリストはすべての人たちの主であるので分割して分派を造るなど最も不敬なことです。「パウロはあなた方のために十字架につけられたのですか」と聞いています。パウロは公平で自分の名をかたる分派にも批判をしています。パウロは 14 節を読むと、「クリスポとガイオ以外に、あなたがたのだれにも洗礼（バプテスマ）を授けなかったことを、わたしは神に感謝しています」と言っています。クリスポはユダヤ人であり会堂長でしたが、一家をあげて主を信じるようになりました。ガイオは別名ユストという人ですが、この家で礼拝をしパウロも住んでいたのです。多分クリスチャンでパウロたちは世話になったのでしょうか。16 節にあるように、ステファナという人はアカイヤ州の初穂でした。アカイヤ州はコリントやアテネがある半島全体の州です。七里教会の皆様方も多分初穂の方々が多いのではないのでしょうか。信仰の2世は、親を見て育ちますから、教会の奉仕は大体教えられなくても出来るのです。お祈りも子供のころから親のお祈りを聞いているので、すらすら口から出るのです。教会の文化で育っているのです、何かお願いしても違和感なく「はい」と言って、してくださる方が多いです。さすがだと思います。その様に教会の業は親から子へと受け継がれていくのです。昔母教会の話ですが、その教会の牧師の息子さんはすごかったです。高校の3年生位でしたでしょうか、もう礼拝の奏楽をこなし、青年会ではリーダー的存在で皆を引っ張っていき、活躍していました。でも牧師にはならず、あるキリスト教主義の学校の校長先生になって指導していました。懐かしく思い出します。今は天国におられます。パウロはなぜ洗礼をあまり授けなかったのでしょうか。16 節で言っています。「もっ

とも、ステファナの家の人たちにも洗礼（バプテスマ）を受けましたが、それ以外は誰にも授けた覚えはありません」と言っています。結局、洗礼を受けると党派心が起こりお互いの嫉妬心や競争心が出て競い合うようになる。他より自分たちが優位につきたいと考えるからではないでしょうか。それで人数を頼みとするのです。初代教会のクリスチャンがこうですから考えさせられます。洗礼を受けるとはどういうことなのか。これだと世の人々と同じになってしまう。今で言ったら政治の派閥と同じではないでしょうか。何とか派、何とか派の派閥争い。なぜパウロは洗礼を受けなかったのか。その答え。17 節「なぜなら、キリストがわたしを遣わされたのは、洗礼（バプテスマ）を受けるためではなく、福音を告げ知らせるためであり、しかも、キリストの十字架がむなしなものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるためだからです」と明確に答えています。使徒としての本領をいかんなく発揮しています。パウロは洗礼（バプテスマ）を大事にしていました。ローマの信徒への手紙 6 章 3～4 節でこのように言っています。「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼（バプテスマ）を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。わたしたちは洗礼（バプテスマ）によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです」と教えています。パウロがローマ書を執筆したころはパウロの晩年の頃であり、死が迫っていたのです。事実そのころ、ローマの官憲によって逮捕される寸前でした。パウロの使命は福音の種を蒔くことでありました。福音とは主イエス・キリストの福音です。その福音を言葉の知恵によって伝えるのではなく、主イエス・キリストの十字架と復活をそのまま人々に伝えたいと願ったのです。言葉の知恵とは、ギリシャ人の知恵です。パウロがアテネで伝道していた時、この町の至る所に偶像があるのを見て憤ったのです。広場では哲学者たちが議論をして時間をつぶしていました。パウロがイエスと復活について福音を知らせると、相手にされず体よく追い払われたことが使徒言行録に書かれています。ですからかつて律法学者であったパウロは、アテネ人と話していてももちが明かないことはわかっていたのでしょうか。所詮土俵が違うからです。（ヘブライズムとヘレニズム）それで、パウロは言葉の知恵は使わず、それはどういうものかという、美しい修辞学、修辞学とは巧妙な言い回しのことです。或いは哲学的な言い方、それはエピクロス派やストア派の考え方や言い方です。それはどのような考え方なのでしょう。彼らは人間の幸福を追求していました。エピクロス派は人間の幸福とは快樂を楽しむこと、こそ幸せがあると論じ、ストア派は、反対に人間の情欲を抑えた生活の中に幸せがあると考えました。ですから禁欲主義者とも言われています。キリストの福音とはそのようなことではなく、主イエス・キリストの福音を信じる時、そこに幸せがあると説きました。それで難しい哲学的用語は用いず、また、そのような言葉の知恵も使わず、ただ十字架の言葉を信じる者は救われると説いたのです。しかし、このコリントの集会所も後には 3 世紀までのアカイア州の住民の多数がクリスチャンになって教会が建てられていくのです。パウロは「心一つにしなさい」と教えました。

礼拝生活をしている私たち、一つの霊で結ばれているのです。そこには男も女もなく、老いた者も若い者もなく皆一つの帯で結ばれているのです。分母はキリストで、乗っかる分子は個人個人です。個人は様々な個性があるけれどもそれがいいのですね。皆同じ個性ではどうでしょうか。違う個性だから楽しいのです。どうして神の教会なのか、それは後からわかるでしょう。これからも心を一つにして歩んでいきましょう。